昭和窯業株式会社

「　レンガ　」

日本でレンガ建築が流行したのは明治時代、明治維新時である。
レンガ建築物が一番初めに出来たのは、幕末時代、長崎の海軍伝習所の長崎製鉄所の建設が始まりである。
しかし、当時の日本の運搬手段は乏しく、重いレンガを持ち運びする術を持っていなかった。
その為、優れた機能を持ったレンガが流行ることはなかった。
その後、幕末時代が終わり、明治時代に変わった頃、外国との交流が盛んとなり、オランダやフランス等の国から来たお雇い外国人の指導で、より扱いやすく、強いレンガを製造することが可能となり、本格的にレンガの製造、建築が行われた。それからレンガはたちまち流行り始めた。

「　赤　」

日本人は、レンガの鮮やかな赤を目にした時、これぞ西洋文化、これこそ文明開化である、と強烈な印象を受けた。レンガは土を固め、焼くものであり、焼き物の一種である。最初は土色だったレンガは、１０００度以上の窯で焼かれて、赤く色づいていく。そこから生まれる赤は、焼き物特有の温かさを感じる赤であり、当時の日本人は、その赤に新鮮な外国文化を記憶させた。

「美しく老いてくレンガ」

そして、その赤は、５０、１００年と時を重ねるにつれ、年期の入った表情になる。
一般的な外壁を使用すると、１５年程で汚れが目立ち、痛み始め、補修が必要になる。
しかし、レンガは５０年程から汚れが目立ち始め、主成分である土の影響で草が茂り始めるが、むしろそれを喜ぶ人もいるのだ。初めから５０年、１００年経過しているレンガを求めて問い合わせている人も少なくない。日本の文化でいう侘び寂びであり、日本の庭園のような同じ美しさがあるのだろう。

昭和窯業株式会社
製造業
江別市工栄町 68-2
011-382-3415
代表取締役社長
西村卓郎

左：代表取締役社長　西村　卓朗　様
右：工場長　宍戸　勝敏　様

「昭和窯業」

明治時代、北海道でもレンガ製造は始まっていた。
樺戸、帯広、網走でもレンガは作られたが、江別市野幌周辺が最大級の生産地となった。最盛期には１０数社あったレンガ会社も現在では３社となった。

「江別のレンガ」

実は、北海道はレンガを製造するのに不向きな環境である。
レンガの作り方は、簡単に言うと土を固め、１０００度以上の窯で焼き上げ、乾燥させることで完成する。乾燥させることが大切なのだ。レンガは、完全に乾燥させないと、含んだ水が凍結し、膨張して亀裂など凍害の原因となる。しかし、この不向きな環境を攻略し、生まれたのが江別のレンガである。北海道の気候に合わせて、進化したレンガは、より高温で焼くため、密度が高く、凍害に強いレンガに仕上がる。しかし、これを実現させたのは技術だけではなく、高温で焼いても耐えうる素材を持った江別の土があってこそ、強いレンガが生まれたのである。

「今の若者に一言」

「嫌われることを恐れるな」

流行に流されず、自信を強く持つこと。
周りで赤が流行っているから赤を身に着けるのではなく、自分で自分なりに自分に合う色を自分で見つける。そうやって上へ目指していく。